

恩納村の道のあゆみ

私たちが普段利用している道は、環境や人々の暮らし、また歴史的な出来事によって新しく開通したり、整備されたりしてきました。今回は恩納村の道の歴史をみてみます。

【恩納間切時代（1908年より前）】

恩納間切を往来する人々は宿道、脇道、原道を使って移動していました。宿道は現在の国道のようなもので、首里から地方へ通された主要な道でした。恩納間切を通る宿道は首里から浦添、北谷、読谷方面を通って恩納間切に至り、名護、本部、今帰仁へ向かうルートでした。読谷山間切（現在の読谷村）の喜名番所から本部へ向かう区間は「国頭方西海道」と呼ばれ、村内の真栄田の一里塚（宿道には一里ごとに塚が作られていた）から仲泊の一里塚までは、現在、国指定史跡となっています。

脇道は宿道の通っていない村々や東西の宿道を連結する道で、現在の県道に近いものでした。恩納村では金武町への道や真栄田、塩屋、宇加地から読谷村へ通じる道などがこれにあたりました。原道は現在の村道のようなもので、こちらは各ムラ（現在の字や区）が管理していました。

【戦前の道路】

1908（明治41）年に沖縄県及島嶼町村制によって恩納間切は恩納村になりました。この頃から宿道にかわる県道（現在の県道とは異なる）の建設がはじまります。村民や周辺地域の人々も工事にあたりました。重労働でしたが、給与を求めて男女ともに工事に参加したそうです。建設には数年かかり、1914（大正3）年頃に伊武部まで通ったと言われています。この工事で谷間だった恩納区の船越が埋められました。

県道が開通すると、荷馬車や客馬車、自動車も通るようになりました。1922（大正11）年には嘉手納から軽便鉄道が開通したため、荷馬車で

嘉手納まで貨物を輸送しました。



1号線に建てられた道路標識（沖縄県公文書館所蔵）

【戦後】

米軍は読谷、嘉手納の両飛行場を制圧すると、トラックで物資や人員を移動するため、また戦車の通行のため、道路の幅を広げる改修、整備を進めました。恩納村を通るかつての県道も拡幅され「軍用道路1号線」（以下1号線／現在の国道58号）となりました。米軍に収容されていた人々も軍作業として道路整備に駆り出されたそうです。コーラルを敷いただけの道路は凸凹で、車が通るたびに土埃が舞いましたが、1954（昭和29）年、本土の大手企業によって道路改修工事が行われ、那覇―名護間のアスファルト舗装が完成しました。

1号線は那覇市明治橋から国頭村奥までの幹線道路で、那覇から読谷までが軍道路、読谷から名護までは軍営繕道（のちに軍道）、名護以北が政府道路という管理に分けられていました。恩納村を通る部分は軍営繕道にあたりました。軍営繕道とは、政府道でありながら維持管理は米軍が行う道のことでした。

米軍はアメリカ本国の道路番号の付番をもとにして、沖縄本島を縦断する道には奇数番号、横断する道路には偶数番号を付けました。現在の国道329号は13号線、仲泊から旧石川市東恩納への道路は6号線でした。主要な道路には米軍による道路標識が立てられました。

復帰直前の1971（昭和46）年頃、北部縦貫道路建設の話が持ち上がりました。これは1975（昭和50）年に本部町で開催される沖縄国際海洋博覧会の関連事業で、当初は恩納村もルートに入る西側コースが想定